

中医取消論争に見る中国伝統文化

— その現状と問題点 —

杉本 雅子

はじめに

2006秋、中医界に激震が走った。インターネット上で「中医中薬の医療からの撤退」を求める署名が行われたのである。折しも中国は伝統文化花盛り。北京オリンピックの開幕式を2008年8月8日午後8時8分に開幕式を始めるという「8」へのこだわりは、我々の目には奇異に映るが「8」は「発」と音が通じ、中国では「発達」「発財」(金儲け)を意味する縁起のいい数字である。公式見解では8月8日は立秋の頃だからというのだが、実際には2008年の立秋は8月7日であり、8時8分まで並べるとすれば、やはり、「発達」「発財」を願っての験担ぎとしか思えない。下四桁が8888の携帯電話番号が15000元(日本円にして24万円程度)で取引される庶民社会と同じ感覚で、オリンピックの開会時間が決められたのである。これを他愛ない言葉遊びと笑うのは簡単だが、そこは中国、オリンピックのキャラクター決定日を、11月11日という「重陽」にもってくるあたりは、さすが陰陽五行思想の国と妙に感心したりもする。伝統文化ということでは、中国語の学習拠点として世界各地に展開中の「孔子学院」。海外で最も名の知れた孔子を外交官に仕立てて、中国文化を世界にPR中である。その孔子に代表される国学は、国内では、企業経営者などニューリッチの間で新たな学びとして好評を博している。

こうした状況は、肯定的に評価すれば「伝統文化の復興」だが、否定的に言えば「迷信の復活」という見方もできる。この現状を中国政府はどう捉えているのだろうか？また、そうした状況の中で、中国伝統文化のもう一つの顔ともいべき中医学がなぜ否定されなければならないのであろうか。

本稿では、「中医中薬の医療からの撤退」を求める署名が行われた経緯と、その周辺の状況から、現在の中国と伝統文化の関係、そこに存在する問題点について考察をすすめていく。

第一章 〈中医取消署名〉

第一節 中医取消論

1、張功耀：〈告別中医中薬〉(さらば中医中薬)

事の発端は中国衛生部主催の定例記者会見だった。

2006年10月10日、中国衛生部主催の定例記者会見の席上、中国共産党青年団の機関誌《中国青年報》の記者が次のような質問を行った。

インターネット上で行われている中医の廃止を求める署名活動で、すでに1万人以上の署名が集まっている。署名しているのは、主に医療業務に携わる人たち。5年以内に、国の医療体制から中医をはずして民間に戻すことで、西医を国が認める唯一の医療技術とするという意見である。こうした状況について、どう考えているのか？また、我が国の国粋である中医になぜこのようなことが起きているのか？

《中国青年報》の記者が発したこの質問は中国医学界に大きな衝撃をもたらした。インターネットのブログで、中医の取り消しを求める署名運動がおこなわれているというだけでも十分センセーショナルだが、加えて、賛同者は総じて医療関係者であるというのである。

ここで言及した署名活動というのは、中南大学科学技術・社会発展研究所の張功耀教授（専攻は社会科学史）が、ニューヨーク在住のリハビリ科医師王澄氏との連名で、2006年10月7日、インターネットブログサイト《和訊博家》上の自らのブログで行った呼びかけ〈中医中薬の国家医療体制からの撤退を求める署名に関する告示〉（以下、〈中医取消署名〉とする）を指している⁽¹⁾。要旨は以下の4点。

1. 憲法第21条にある中医関連の内容を削除し、いかなる科学についても具体的に言及しないものとする。
2. 科学医学（西医）を国家の唯一の主流医学とし、五年以内に中医を国家医療体制から全面的に撤退させ、「無害」であるという原則に基づいて、国家医療体制外の補助的存在とする。
3. 科学的根拠に乏しく、科学的精神に反し、安全性が保障されていない中医中薬研究を直ちに停止し、浮いた費用で、都市の貧困層ならびに農民を医療難から救う。
4. 中医中薬の撤退に際し、すでに医師資格等を有している中医師を自主的に主流医学に転向するよう指導する。

署名方法はメール。職業と所属、所在都市名さえ明記すれば、ペンネームや仮名もOKだという。

唐突に見えるこの署名活動だが、張功耀はこれに先立つこと一年前、2005年11月19日・20日と武漢理工大学で開かれた「第2回科学技術文化と社会の現代化」学術検討会において、〈さらば中医中薬〉という中医学を痛罵する文章を発表している。張功耀の主張は以下の4つの立脚点に基づく。

1. 文化の進歩という観点で。文化の進歩に関わっていない中医中薬は先進的文化ではないがゆえに、復古はもちろん、現代化された中医中薬をめざすこともできない。
2. 科学を尊重するという観点で。因果関係も原理も不明確な中医中薬に告別すべきである。
3. 生物保護の観点で。非科学的な治療で生物の多様性に危険を及ぼす中医中薬に告別する

自覚を持つべきだ。

4. 人道的な観点で。(1)もったいぶって患者をだます。(2)異物や毒物を「薬」に入れ、患者に危害を加える。(3)いかめしい「奇法」を施し、その責任を放棄する。これらは、人道的問題であり、「仁術」の真相をあばかなければならない。

今回の〈中医取消署名〉が政府への要求であるのに対し、中医批判の主旨がより明白で、直接中医廃絶を求めているこの発表は、当該学会では反響を呼ばなかったらしく、総括記事でも、この発表についての言及はない⁽²⁾。そうした反響の低さもあってか、張功耀は12月23日には、それを《北京大学科学史と科学哲学サイト》の〈科学文化論壇〉に「意見募集原稿」として投稿⁽³⁾、完成稿を大連医科大学の《医学と哲学》に投稿し、2006年第4期採用されるにいたっている⁽⁴⁾。

また、〈中医取消署名〉に先立つ8月31日には、〈告別中医中薬民間行動綱領〉を、9月8日には〈再論告別中医中薬〉(再び中医中薬を論ず)をブログに書いており⁽⁵⁾、今回の署名活動は〈綱要〉に則った活動の一環といえる。

2、方舟子：《中医騙子（中医ペテン師）》欄

実際には張功耀よりずっと早くから中医批判を展開している人間がいる。方舟子である。「反假闘士」(偽物摘発戦士)を以て自認し、①学術上のペテン摘発、②中医批判、③ニセ環境保護批判、④ニセ健康食品批判をその主要な対象項目として掲げている方舟子は、1994年に《新語絲》を創刊、1997年からは電子雑誌として発行している《新語絲》誌上で、1998年以降《中医騙子》(中医ペテン師)欄を設けて中医批判を展開している。《新語絲》という名称は、五四新文化運動期に魯迅や周作人らが創刊した《語絲》の名を踏襲したものであり、魯迅のいう「思うがままに述べ、憚ることなし」⁽⁶⁾をその特色としている。《中医騙子》欄には、2006年9月中旬以降、張功耀の署名活動と時を同じくして、ほぼ毎日、数篇の文章が掲載されているが、これ以外に、方舟子自身のブログにも《中医批判》の欄がある⁽⁷⁾。方舟子の特徴はインターネットの利用に長け、意見の公開までにタイムラグがないことと、《人民網》の〈方舟子大いに科学を語る〉、《搜狐》ITカテゴリーの〈方舟子のニセ退治〉など、大手サイトに自身のコーナーをもち、ネット上の言説に一定の影響力をもっていることだ⁽⁸⁾。数の多さと、「相手をばっさり切って捨てる」その手法から、インターネット界ではヒーロー視されている感すらある。この点で、張功耀は方舟子に遠く及ばない。また、張功耀の批判の矛先がほぼ中医に限定されているのに対し、方舟子の場合、「ニセモノ」という総合枠の中に「偽科学」という大枠があり、その中に「中医中薬」を位置づける構成となっている点が大きな違いである。中医を批判するという一点においてのスタンスは合致しているが、立脚点そのものが異なるのである。なお、方舟子は「お上に誓願するような手法はどうかと思う」という理由で、張功耀の署名活動にはサインし

ていない。とはいえ、この張功耀の活動は、人々に中医学について考えさせるきっかけとなり、張功耀はネット署名という方法によって時の人にはなったが、結果的に中医批判者としての方舟子をメジャーに押し上げる役割を担ったともいえる。〈中医取消署名〉問題を通じて、《新語絲》は中医批判の基地としての知名度を上げた。以後、方舟子は中医批判の戦士として、「科学」であるかどうかを唯一の判断基準として、激しい中医批判を展開していくのである。

第二節 反 応

1、政府レベルの反応

この署名活動に実際に応じて署名したのは最終的に235名、決して多数とはいえない。ところが、前述した《中国青年報》の記者の質問にあるように、「すでに1万人以上の署名が集まっている」という風評が流れていたのである。これは、〈中医取消署名〉活動の影響の大きさを示す。衛生部のスポークスマンは、この活動に対し10月10日、定例記者会見の席上、質問に答える形ではあるが「中医の取り消し」を明確に否定、続いて10月17日には中医の直接の監督官庁である国家中医薬管理局のスポークスマンが、やはり記者会見での質問に答える形で、「過去にあった中医薬否定事件と同じく、ばかばかしいドタバタ劇にすぎない」と述べ、中医を保護・発展させていく方向を表明した⁽⁹⁾。

政府側が中医擁護の根拠としてあげているのは以下の三点である。

1. 憲法に「現代医薬と我が国の伝統医薬を発展させる」と明記してあること。
2. 2003年に出された《中華人民共和国中医薬条例》および《国家重点基礎研究發展》(973計画)に「中医理論基礎専項」が組み込まれていること⁽¹⁰⁾。
3. 「第十次5カ年計画」の国家科学技術難関研究計画重点項目として、〈中医薬の治療効果及びその安全性に関する基本問題研究〉が明記されていること。

たしかに、中国政府は、1955年に中国中医科学院を設立し、中医中薬の現代化と科学研究を主要課題の一つと定めている。中医科学院は2005年までにすでに900の項目で17207万元もの科研費を受けてもいる⁽¹¹⁾。また、国際社会で中医学が受容されていることを受けて、政府はここ数年、中薬を中国独自の「ブランド」として国際社会に売り出すべく、国際基準制定に努力している⁽¹²⁾。この答弁はこうした政府の方針を確認したものであり、政府の方針であるがゆえに、中医取消はあり得ないという論理以外の何ものでもない。

2、民間レベルの反応

インターネットのブログから発せられたこの署名に、民間レベルで、同じくインターネットを使って、かつ署名活動を以て対抗しようとしたのが、10月11日の日付で出された〈我が中華を愛し、我が中医を愛し、中医中薬文化を推進しよう〉百万人署名公告〉(以下〈愛中医署名〉

とする)である。発起人は上海医薬大学附属岳陽中西医結合医院の李医師、後援は《愛華網》CEO高明輝⁽¹³⁾。公告では以下の5点を要求している。

1. 憲法を尊重し、衛生部の指導の下、中医薬業を保護・発展させること。
2. 中医に対する優遇措置をとること。とくに針灸は副作用がなく現代社会が求めている最高の境地にあり、環境に優しく、数々の奇跡(原文は神奇)をなしてきた中医に替わる医学はない。
3. 中医の基礎教育を強化し、中医の神髄を会得できる教育システムを整備すること。
4. 世界遺産登録に全力を挙げること。
5. 安心して中医に従事できるよう、中医の待遇を改善すること。

中医取消を求める署名活動と、中医発揚を求める署名活動——相対する両者だが、共に位置づけとしては、「国家発展及び改革委員会」(略称「発改委」)に提出する「新医療改革に関する意見」というものであり、「発改委」の指示に則って、2006年12月30日までに書面ならびに署名メールを「発改委」に提出すると明記している。「発改委」が公式サイトで広く意見を募ることを発表したのが9月27日⁽¹⁴⁾、時間的に見れば、張功耀の署名活動は、まさにこれを待って始められたといえる。しかし張功耀の〈中医取消署名〉が彼なりの根拠を挙げて取消の根拠を述べているのに対し、それを受けて出されたはずの〈愛中医署名〉は要望を列挙するにとどまっており、タイトルから導かれる「愛中華」→「愛中医」という図式は、張功耀の指摘した論点とは別の次元、国を愛するかどうかという次元にこの問題を位置づけようという意図をさらけ出す結果となっている。これは、中国の伝統文化をめぐる論争の際よく見られるパターンである。

第二章 争点の所在

インターネットを通じて広がったこの問題は、同様にインターネット上で盛んに議論された。中医や健康関係の各サイトはもちろんのこと、ポータルサイト《新浪網》が《中医存廢論出る》(「中医取消」ネット署名騒動)という特集を、《搜狐》が《中医廢絶断じてノー》という特集を組んだほか、中国共産党湖南省委員会系の《紅網》でも《さらば中医?それとも中医を救え?》という特集が組まれるなど、ネット上の話題をさらった⁽¹⁵⁾。また、インターネットという性格を駆使するかのように、これに合わせて、中医に関するアンケートが短期間のうちに集中的に実施された。

本章では、そうしたアンケートの設問を通じて争点および問題点の所在を探っていく。

(なお、各設問の頭に、a. b. c … の記号が附してあるが、これは、整理の都合上、杉本が附したものである。)

第一節 中医取消論争以前のアンケートに見る中医の位置づけ

【1-1】中医を神秘的だと思うか？ : 2004年1月15日から15日間。《新浪網》実施。

- a. 中医を神秘的（原文は神秘）だと思うか？ [・はい ・いいえ ・わからない]
- b. 中薬を飲んだことがあるか？ [・ある ・ない]
- c. 病気になったらまずどんな治療をするか？ [・中医 ・西医 ・その他]

文化テーマ専門の《中医在線網刊》（中医オンラインマガジン）創刊記念文化調査として行われたもの⁽¹⁶⁾。ごく初歩的な中医の受容の実態調査と意識調査だが、aの設問の立て方からは、「中医治療＝神秘的」という構図が一般に存在していることを示している。

【1-2】中医は伝統文化の重要な一要素である。あなたは中医をどのように見ているか？

: 2005年1月5日から。《新浪網》実施。19827人以上が参加⁽¹⁷⁾。

- [・中医も西医と同じで科学的な面も間違いもある ・中医は経絡などより神奇（原文は神奇）なジャンル ・中医を信じる ・西医を信じる]

〈中国人よ、伝統文化に対するアイデンティティやいかに〉という大型調査の中の1項目。特徴は、まず、「伝統文化」という位置づけを示してから設問であること。西医との比較の上で、「科学」と「神奇」という対極にある概念が、いずれも中医を評価する語として用いられていることである。

【1-3】中医についてどう思うか？ :2006-08-17から2007-08-24まで。《網易》実施。

- a. 中医とは？ [・長い時間をかけて発展してきた科学大系 ・科学だが悪い要素もある ・精華よりカスが多い ・徹底した偽科学]
- b. 病気になったらどちらを選ぶか？ [・主に西医 ・主に中医 ・どちらもあり]
- c. 中医を信じるか？ [・信じる ・半信半疑 ・信じない]

2006年5月、イギリスで中薬の副作用事件が起き、中薬に対する厳しい検査体制が敷かれることが決まった。8月14日、このニュースが中国で報道されると「中医は科学か、それとも偽科学か」が論争になった。このアンケートは、イギリスでの決定が中国で報道された直後の8月17日から《網易》で組まれた特集《中医西医遭遇戦》⁽¹⁸⁾のなかで実施されたものである。

後述するが、〈中医取消署名〉直後のアンケートでは、まるでタブー視されているかの感のある「偽科学」という言葉が、ここでは「徹底的な」という形容詞付きで用いられている。と同時に「精華よりカスのほうが多い」という、伝統文化を現代に取り入れる際の基準も用いられている⁽¹⁹⁾。〈中医取消署名〉以前は、中医は「現代科学としての西医」との比較という大きな枠組みのもと、「科学としての中医」と「伝統文化としての中医」というダブルスタンダードが適用され、「神奇」「神秘」という概念を伴うのが当たり前のように位置づけられていたことがうかがわれる。

第二節 〈中医取消署名〉以後のアンケートに見る争点

【2-1】中医について、また中医を取り消すべきかについてあなたの見方は？⁽²⁰⁾

：2006年10月11日から。年末までに55690人以上が参加。《新浪网》実施。

- a. 中医は取り消すべきか？ [・大いに支持すべき ・成り行きに任せる ・取消]
- b. 病気になったら普通はどちらにかかる？ [・中医 ・西医]
- c. 中医に優位な点はあると思うか？ [・ある。副作用が少ない ・ある。総合治療だから ・
ない。論理が検証されていないから]

2006年10月11日、まさに〈中医取消署名〉を受けて、《新浪网》が実施した大規模なアンケート調査であり、ストレートにその是非を問うているのが特徴。また、中医の優位な点をたずねている設問では、優位であるとする選択肢と優位ではないとする選択肢の割合および内容が対応していない。優位であるとする選択肢には「副作用が少ない」と「総合治療」という中医に対する一般的な認識が挙げられているのに対し「優位ではない」とする選択肢の方は「効果がない」或いは「時間がかかる」ではなく、「論理が検証されていない」という異なる角度からの答えが用意されている。実質的には「科学的根拠の欠如」に相当する内容にもかかわらず、あえて、〈中医取消署名〉が批判のポイントとしている「科学」という語を避けているかのようだ。

【2-2】二世代の目に映る中医像⁽²¹⁾

：2006年10月。《新周刊》・《新浪网》実施。

- a. あなたの日常と中医 [・中薬製品は使うが中医には診てもらわない ・中薬製品も使わないし中医にも診てもらわない ・中薬製品も使うし中医にも診てもらおう]
- b. 中医理論（「湿熱」の概念など）を用いて自分の身体の状態を解釈することがあるか？ [・はい ・いいえ]
- c. 暮らしの中で、中医学をどのように取り入れているか？(複数選択)[・病気治療 ・美容 ・中医薬関連健康食品やサプリメント ・健康相談 ・食事(食事療法) ・中薬成分入りの日用品]
- d. 次にあげる常識のうち、中医と関係がないのはどれ？(複数選択)[・長時間コンピュータの画面を見たときは、緑の植物をみるのがいい ・おしろいには真珠の粉が入っている ・飲酒後に茶を飲むのはよくない ・手の虎口を押すと鼻血が止まる ・広東風スープ ・王老吉を飲む ・公園にある玉砂利の道 ・喉が痛むときは雪梨を食べる]
- e. 現代の暮らしに中医薬を取り入れる上ですべきことは何か？ [・文化的伝統として大いに宣伝すべき もっと西洋薬と合体させる道を探るべき 製品の外観、パッケージ、使用法などをかいぜんすべき 中医病院と中医学部を増やすべき これまで通り]
- f. 外国人が中医に診てもらう理由は何だと思うか？ [・中国文化に対する好奇心から ・

病気によっては西洋薬よりよく効くから 急病だったのでどこでもよかった ・中医の方が費用が安めだから]

g. 中医学がなかったら、生活に影響が出ると思うか？[・でる ・でない]

雑誌《新周刊》が、〈中医取消署名〉後の特集に向けて《新浪网》と共同で実施したアンケート。《新周刊》2006年第22期(2006. 11. 16)総239期〈あなたにとって中医とは?〉のなかに掲載。中医が日々の暮らしにいかにか受け容れているか、中医的な考え方がいかに人々の間に浸透しているかという実態の把握に力点が置かれている。ただし、gのような、中医学がなくなった場合の庶民への影響を見るという項目は、〈中医取消署名〉を意識したものであり、25歳以上か以下かによって受容の違いを見ている点からは、その延長線上にある「中医中薬の将来性」というキーワードが見えてくる。

また、eで今後の中薬の方向性をたずねているが、選択肢には、中国ブランドとしての中薬推進政策（対世界）、伝統文化発揚の一環としての中医推進政策（対国内）、毛沢東以来の中西医結合政策といった、政府の中医政策の例示ともいべきものが並んでいる。加えてfで外国人の中医に対する見方をたずねており、eと併せて、西医中心の国際社会における中医中薬の需要の度合いを中国の庶民レベルで測ろうという意図が見受けられる。

【2-3】あなたは中医を信じるか?⁽²²⁾：2006年11月7日。中央電視台《東方時空》実施。7058人参加。

- a. 中医に診てもらったことがあるか？ [ある ない]
- b. 中医にかかった率は？ [少ない、たまたま数回偶尔几次 比較的多い 病気にかかったら毎回]
- c. 診てもらった場合、効果についてどう思った？[効いた わからない 効かなかった]
- d. 中医でも西医でも治せる病気の場合、どうする？ [先ず西医に診せ、ダメだったら中医に 中西医结合医院に行く 先ず中医に診てもらい、ダメだったら西医 西医院にしか行かない 中医院にしか行かない]
- e. 中医にかかるとしたらどんな時？ [難病・原因不明の病気 慢性病（糖尿病や関節炎など） 病後の体調管理 健康のため その他 軽い持病（頭痛や下痢など） 整形外科急性症状（急性胃出血や急性胃腸炎、外傷など）]
- f. 中医にかかれないとしたら、その理由は？ [効き目が遅い 中薬は飲みにくいし煎じるのが面倒 その他 中医では治らない いつも西医に行くので考えたことがない]
- g. 中医の発展に関してあなたは？ [国はもっと中医に力を入れるべき 現状維持でよい。 中医に任せよ 中医の発展を制限すべき]

【2-2】同様、基本的な中医受容の実態、中医に対する一般的な認識を問う設問がほとんどだが、eでは従来のアンケートに見られたような中医か西医かの二者択一方式ではなく、中医と西

医の「棲み分け」を意識した設問が用意されている。また、gで直接「国家の中医政策」を問うているところから、〈中医取消署名〉との因果関係が明確である。

〈中医取消署名〉以前に行われたアンケートでは「伝統文化」と位置づけられていた中医が、〈中医取消署名〉以後は、「実用に供されている治療法」という位置づけに変わっている。理念的ではなく、実際の生活の中で実用に供されているという点は、中医が他の伝統文化と決定的に異なる点である。方舟子に反論する際「中医学に反対するということは伝統文化に反対するということだ」という表現がよく使われるが、これに対し方舟子は「中医学はもともと九家（十家）にも入れてもらえない方術にすぎず」「国学でもなければ国粋でもなかった」のに、近代になって急激に地位を上げられたことにあきれると述べたうえで、次のように述べる。

我々は科学という観点から中医に反対しているのであって、文化という観点で反対しているわけではない。中医の科学的価値を否定するからといって中医の文化的価値を否定することにはならない。私は中医を文化遺産として保護し、研究することには賛成する。少なくとも、昔の人がどのように医者にかかり薬を飲んだかがわかるのだから。それは、私が甲骨文研究を支持するのと同じだ。昔の人がどのようにト占し、漢字がどう変遷してきたかを知る手段としてなら、私は甲骨文の研究を完全に支持するが、もしト占は科学であって今も使うべきだというのであれば、それに対してはきっぱりと反対する⁽²³⁾。

〈中医取消署名〉以後のアンケートは、「中医需要の実態」、「中医と西医の棲み分け実態」、「中医中薬の将来性」を具体的に把握しようという意図が顕著になっている。〈中医取消署名〉で提起された中薬の安全性に対する認識を問う設問や、ストレートに「科学」であるか否かを問うような設問はないのだが、設問の設定それ自体において、中医の位置づけが「文化」から、「医療」へと変化してしまっている。図らずして、方舟子の主張する「科学」の土俵に上がってしまったといえよう。

「科学」をキーワードにし、かつ「伝統文化」としての中医学と、「科学」としての中医学を峻別することによって、この問題は「中医取消」論の枠組みを超え、「中医は科学か科学でないか」という問題を越え、「科学と伝統文化の関係」という五四以来の命題に回帰していくことになる。そうした観点で実施されたのが、もう一つのアンケート、〈中医は本当に救いようがないと思うか?〉である。

第三節 もう一つのアンケート

【3-1】中医は本当に救いようがないと思うか？：2006年11月21日から12月28日。《網易》実施。
[・名士がみな反対するのだから、中医学は絶対に信じられない　・名士でも間違を犯すことがある。中医学は科学的　・誰を信じたらいいのか分からない]

このアンケートは、《網易》で組まれた特集《ここにあげたのは中医学に反対した名士——中医学に反対した中国人名士》(以下《中医に反対した名士》)に合わせて行われたアンケートである。中医学に反対した名士という定義の下、魯迅・郭沫若・陳独秀・清末の変法派梁啓超・民初の新儒家梁漱溟・嚴復といった錚々たる人々が並んでおり、それに加えて、何祚麻や方舟子など、今日中医反対を唱えているメンバーの肖像画や写真が、その主張とともに紹介されている。すでに張功耀は〈さらば中医中薬〉の中で、近代以降中医廃絶を唱えた著名人の名を挙げており、これ自身が張功耀が「中医取消」を唱えた論拠の一つであった⁽²⁴⁾。しかし、これを論拠とすることは、中医の問題にとどまらず、伝統文化全体にわたる根本的な問題を提起することになる。

このアンケートの直前、2006年11月14日、方舟子らの「反科学」活動に対し、中国科学院自然科学史研究所の宋正海が、「偽科学」という用語を《中華人民共和国科学技術普及法》から削除することに賛同を求めるメール「偽科学」という語を伝統文化滅亡の口実にはしてはならない」を研究者らに送って、賛同の署名を求めた⁽²⁵⁾。

現在、中華文化は未曾有の挑戦を受けている。中医取消騒動が起きたことだけを指しているのではない、何か魂胆のある人たちが「偽科学」批判にこと寄せて、実際には、我が国の伝統文化および豊かな伝統文化の土壌に根ざしたチャレンジ精神のあるオリジナリティ—豊かな科学技術の成果や民間科学を攻撃しているのであり、その狙いは中国を完全に西洋化させることにある。

これは、12月1日、主張に賛同した150名の署名を公表する文章で、宋正海が述べているものだが、ここで彼が用いた「科学」・「伝統文化」・「西洋」という語は、そのまま、民末清初から五四時期を経て新中国へと大きな社会変動のダイナミズムとなったキーワードである。中医学に反対したとして今回名前の挙がっている名士は、中国共産党の創始者陳独秀、新儒家梁漱溟、西洋を学びながら中国に回帰した梁啓超と嚴復、五四の思想家・文学者魯迅と郭沫若と、中華民国ひいては新中国に大きな影響を与えた人々である。しかも、西洋思想に通じながらも、単に中国を西洋化しようと主張したのではない人々である。したがって、この線上に立ち「科学」をキーワードにすれば、中医反対派は「歴史的事実」を背景に優位に立てるということになる。いうまでもないことだが、「反“偽科学”運動」を展開しているメンバーは、中医批判を展開し

ているメンバーと重なっている。

この《中医に反対した名士》は、たちどころにネット中に広まった。半年後、ネット民のポータルサイト《騰訊網》の《今日の話題》301期《伝統文化の未来は——中医終結は急務か?》⁽²⁶⁾でも彼らの言説が資料として紹介されている。そうした背景を受けてか、そこに附されたアンケートでは、これまでとは異なり、ストレートに「科学」か「偽科学」かを問うている（2007年4月29日、90,000人以上参加）。

- a. 中医は科学だと思うか? [・科学だ ・科学だろうが偽科学だろうが病気を治せればそれでよい ・偽科学だ ・わからない]
- b. 中医学の未来について、どう思うか。 [・大いに推進し、費用を投入すべきだ ・一定の時期が過ぎたら取って代わられるべきだ ・これ以上引き延ばさず、直ちに廃除すべきだ ・どうでもいい。どのみち中医にはほとんどかからないから]
- c. この特集の質についてどう思うか? [・いい。これからも騰訊の「今日話題」に注目する ・まあまあ。収穫はあった ・ひどい。編集者を罵りたくなった ・無意味。時間の無駄使い]

《今日の話題》では2007年4月から5月にかけて連続で《伝統文化の未来は——》と題する特集を掲載し、《中医終結は急務か?》(301期)、《「風水」は推進すべきか?》(302期)、《儒家は「天下を救う」ことができるのか?》(303期)、《寺廟は商業化すべきか?》(304期)と、伝統文化のあり方について問題を提示、それぞれアンケートを実施している⁽²⁷⁾。しかし、そのうち「科学か偽科学か」という選択肢があるのは、この中医のテーマだけである。このシリーズ名にもある通り、中医は「伝統文化」である。しかし「伝統文化」という出発点がありながら、①対立軸に西洋医学の存在があり、②直接的に命にかかわるといふ、本質的に科学カテゴリーに入る存在であるという点が、他の「伝統文化」との大きな違いなのである。

第三章 背景

第一節 伝統文化への回帰

そもそもなぜ〈中医取消署名〉や“「偽科学」論争”が起きたのか——その背景には、現在中国で起きている「伝統文化」回帰、いわゆる「復古」の風潮がある。

2000年6月、当時国家主席であった江沢民は《中央の思想政治会議における講話》の中で、「依法治国」と「以德治国」を密接に結合させる治国方針を打ち出した。この方針は、2001年10月には《公民道徳建設実施綱要》として制度化され、儒家の倫理道徳である仁愛・誠信・孝悌の三つを核とし、社会公徳・職業道徳・家庭美徳を推奨、推進する国家戦略が具体的に動き出した。

中華人民共和国建国以来、儒家の教えは旧思想の代表として否定されてきた。文化大革命時

期に旧思想・旧文化・旧風習・旧習慣を徹底的に破壊する「四旧打破」が大方針とされたのは周知のところである。文革が終結し、その見直し作業が進む中、政府は1984年には学術組織としての「中国孔子研究基金会」設置を批准し支持を与えた。それが再度見直されたのは、1989年、天安門事件が起きたことによる。民主化を求める非武装市民に対し、武力を以て対応したとして、西側社会からこぞって制裁を加えられたこの事件は、社会主義国に飛び火し、東ドイツ、ソ連という主要社会主義国家の体制瓦解に影響を与えた。それを目のあたりにした中国政府は、社会主義イデオロギーの特化による体制の引き締めという手法をとらず、改革開放政策を堅持しつつ国内体制を整える手法をとった。ここで体制維持と改革開放政策つまり経済発展を両立させるために求められたのが、中国的秩序の回復、すなわち儒学の復興であった。孔子の故郷曲阜で、1984年から「孔子故郷巡り」と銘打って実施していた観光客誘致キャンペーンは、1989年9月から政府の「お墨付き」を得て「中国曲阜国際孔子文化節」と改名、中国内外に向けた大々的かつシンボリックな行事へと変身を遂げた。

さらに、1992年鄧小平の「南巡講話」により「社会主義市場経済」路線が確定し経済が右肩上がりになると、拝金主義が横行、精神的墮落の根源は西洋文化にあるとされ、かわって、中国人の行動規範としての「道徳」の復興が求められるようになった。とくに北京でのオリンピック開催決定（2001年7月）、上海での万博開催決定（2002年12月）と、中華人民共和国建国以来の世界的な行事の開催が決まると、前述した《公民道徳建設実施綱要》も含め「中国的道徳」復興の動きは更に加速した⁽²⁸⁾。

2004年、海外における中国語教育の拠点を「孔子学院」と命名して世界展開の第一歩を踏み出したのをはじめ、2005年5月には中国人民大学が6年生の国学院を設立、6月には中国社会科学院世界宗教研究所に「儒教研究中心」が開設、さらに11月には北京大学哲学系に「乾元国学教室」が設置されている。前述した曲阜の孔子節は、2006年以降さらにパワーアップし、①海峡を挟んで台湾と共に祝うという中華民族の紐帯としての役割と、②ユネスコと共同で孔子教育賞を授与するという、善なる中国の代表としての役割も担っている⁽²⁹⁾。今や「政府公認」として「国学」と同義になることの多い儒学は、「復興」というレベルを超え、新たな興隆へとひた走っているのである。

その一方で、北京大学乾元国学教室では「携帯国学課」と称して、一日一句、先人の言葉を携帯メールで配信する月額制の講座を開設、孔子基金会は孔子標準像なるものを規格化して、使用料を徴収する、など、孔子が「金のなる木」にたとえられ揶揄される状況もある。

五四時期には「打倒孔家店」というスローガンのもと、封建制度の象徴として捉えられていた儒学の、政府公認による復興は、道徳規範としての「儒学」の復興のみならず、儒学と共に生存してきた中国伝統文化全体の復興をもたらすことになる。中国は悠久の伝統を誇る。歴史が長い分だけ伝統文化相互の関係性も高く、それゆえ、それぞれを単体の要素として完全に切

り離すというのは極めて困難である。儒学に限らず、伝統文化でありさえすれば何でも再興といった風潮が出てくるのは、ある意味で当然といえよう。

なかでも、易や占いは、関連書籍の出版、ネットの活用などにより広く普及し、蘇州大学社会学院が都市部に住む3000人余りの小中高大生を対象に行った「科学的素養」に関する調査(2004年実施)でも、46.7%の学生が「占いは科学である」と答えるなど⁽³⁰⁾、占いに対する認識の変化は顕著である。そうした意識の変化はインターネット社会の深化によって加速した。同時期に中国社会科学院国際宗教所と中国無神論学会が行った調査では、伝統的迷信について「祈祷師が祈れば病気が治る」などというのは嘘っぱちだとする学生が88%に上る反面、同じ類の「算命(占い)」はといえば、インターネットと結びつくことでたちまち「科学的予測」に変化し、「少し信じる」41%、「すごく信じる」5%、「困ったときにはインターネットの占いに頼る」11%という結果が出るまでになっている⁽³¹⁾。2006年1月17日《人民日報》の記事〈ネット上の迷信、青少年を幻惑：あなた占う人、私儲ける人〉⁽³²⁾や同年4月5日の同じく《人民日報》〈都市新迷信〉調査：ネット占トがブームに 偽科学普及書がベストセラーに⁽³³⁾に象徴されるように、まさに、新たな「迷信」として易や占いがネット上を跋扈しているのである。

こうしたなか、2006年4月19日《人民網》など19の機構でなる「中国互聯網協会(中国インターネット協会)」は、ネット上に氾濫するポルノや詐欺行為、知的所有権侵害行為、名誉毀損など各種トラブルを防ぐため《文明上網自立公約(秩序あるインターネットに向けた自主規制公約)》を出すことになり、《新浪網》はそれに合わせて「インターネット上で最も不快な行為は？」という調査を行っているのだが、そこに挙げられた25項目の選択肢には、「占星、算命、占トなど封建的迷信などを広める」という項目がポルノ画像やコンピュータウィルスと並ぶ猥雑なものとして上げられている⁽³⁴⁾。しかし、こうした傾向はネット世代の若者のみならず、共産党の思想教育を受けている公務員にも及んでいる。2006年9月から12月にかけて行われた《県クラス公務員素質調査とその分析》では、「迷信を信じない」とする役人の比率が47.6%と半数を割り、一般人と同じ、もしくはより高い比率で、観相、夢占い(原文は周公解夢)、星占い(原文は星座予測)、神籤を「信じる」という結果が出ている⁽³⁵⁾。政府にとっては頭の痛い問題だ。

一方、個人や企業による不動産購買熱を背景にブームとなった風水は、2004年9月9日には中華人民共和國建設部「中国建築文化中心(センター)」主催で、建国以来初の建築文化風水文化サミットフォーラムが人民大会堂で開かれるに到るなど⁽³⁶⁾、政府の後ろ盾を得て復興に向かう一方で、その復興に疑問を呈する声も少なくない。このセンターが2005年9月に南京大学易学研究所と共同で「建築風水文化養成コース」を設置、「建築風水文化執行師」認定証を発行するという報道が流れると、陶世龍〈伝統文化の発揚なのか? 「お守り」販売なのか? — 南京大学での「風水師」養成に疑問あり〉⁽³⁷⁾というタイトルに代表される反対意見が噴出、《網易・

科学技術》は《激論：この科学の時代、「偽科学」はどれだ？》⁽³⁸⁾を組んでこの問題を扱っているが、そこでは「風水」が「UFOや怪獣探し」同様「トンデモ」ものあつかいされるという状況も起きている。また、第二章で述べた《今日の話題》欄《伝統文化の未来は——》シリーズに《“風水”は推進すべきか？》というテーマが設定されていることから、風水ブームの存在と、その対応の難しさがうかがわれる。

さらに、その大元にある《易経》に関しても肯定論と否定論が交錯している。2004年科学者の楊振寧が2004年9月3日に人民大会堂で開催された文化サミットで、「近代科学が中国で芽を吹かなかった原因の一つに《易経》の影響がある」と述べ⁽³⁹⁾、激しい批判を浴びたほか、〈中医取消署名〉と同時期2006年10月8日には、安農〈「科学易」とか「易科学」というものは有りや無きや？〉が《中国青年報・学界視点》に掲載⁽⁴⁰⁾、12日には《網易・探索》のネット週刊誌《科学観察》第56期で《易経は科学の異母兄弟か？》が特集されるなど⁽⁴¹⁾、中医同様、それをめぐっての議論が絶えない。

儒学の復権と同時に、「伝統文化」という名に集約されるものが網羅的に息を吹き返し、政府もなかばそれを追認、国際社会での権威付けや、アイデンティの構築に利用しているという現実が存在するのである。

第二節 科学か偽科学か

前章で述べたように、2006年11月、中国科学院自然科学史研究所の宋正海が発起人となり、「偽科学」という用語を《中華人民共和国科学技術普及法》(2002年6月29日第9期全国人民代表大会常務委員会第28次会議通過、同日施行、以後《科普及法》とする)から削除するよう求めた⁽⁴²⁾。要点は以下の三点。

1. 学会で用いる「科学」の定義をはっきりさせること。
2. 「偽科学」という言葉の使用を慎むこと。
3. 「偽科学」の語を《科普及法》から削除すること。

この動きは単独で、いい方をかえるなら、白紙の状態で起きたわけではない。方舟子らが《科普及法》「第一章 総則」第8条にある「科学普及工作は科学的精神を堅持して、偽科学に反対、それを抑止しなければならない。いかなる組織や個人も科学普及の名で社会の公益活動を損なってはならない。」を盾に、西洋社会の数値化された「科学」つまり「検証済みの自然科学」を唯一無二の基準として、「反「偽科学」」活動を展開しているのに対抗すべく出てきたものである。「科学=善=有用」の選択肢以外を認めない方舟子らは、陰陽五行を含む中国の伝統哲学も含め、攻撃的に否定しているが⁽⁴³⁾、そもそも《科普及法》が2002年に制定されたのは、1999年以降中国が邪教として禁止している「法輪功」に対処するため、つまり、「迷信」を信じることによる政情不安を抑えるためである。

中央に一つの卍、周囲に4つの太極を排した法輪功のマークは、仏家と道家の思想を根底においている。その法輪功批判の際、きまって冠せられるのが「科学を尊び迷信を打破せよ」もしくは「科学を尊び迷信に反対しよう」という語である。1999年4月、天津師範大学の《青少年科技博覧》に掲載された何祚庥の〈青少年の法輪功修練に反対する〉に抗議すべく、20000人ともいわれる信者が陳情に押し寄せ「中南海」を取り囲んだ。さらに、中国科学院法輪功修練者有志署名の「科学論文」〈迷信ではなく、博大にして深遠な科学である——我々科学技術者が法輪大法修練実践から得たもの〉（6月20日付け）⁽⁴⁴⁾がインターネット上を駆けめぐると、中国政府は、同年7月20日、法輪功を「邪教」と認定、禁止令をだした。1999年6月21日、法輪功中南海事件終息に向けての党の方針である人民日報評論員〈科学を尊重し迷信を打破せよ〉⁽⁴⁵⁾は、「科学を尊重し迷信を打破してきた歴史が我が党の歴史だ」とした上で、次のように述べている。

ここ数年、一部の地域一部の組織で愚昧なる迷信が台頭し、反科学的活動・偽科学事件が頻繁に発生している。（一中略一）特に注意が必要なのは、一部の黨員幹部が自分の利益のために占星術・易占い・風水・相性占いなどを信じて神仏を崇め奉り唯心主義の虜となっている点である。その結果、一部の地域では、迷信が科学に勝り、唯心主義が唯物主義に勝り、有神論が無神論に勝るという事態が起きている。

黄巾の乱、白蓮教徒の乱、太平天国の乱など、王朝交代にたびたび宗教が関わってきた中国で、政府が宗教に神経を尖らせるのは当然ともいえる。が、禁止令にもかかわらず、2001年1月23日、旧暦の大晦日に、法輪功信者が天安門広場で究極の修練としての「昇天円満」（天に昇って自らを完結する）を試みるべく、自らの身体に火をつけるという出来事が起こった。そこで制定されたのが《科普法》であり、「反偽科学」という語の中には、反法輪功という意味も含まれているのである。したがって、法輪功事件で功をあげた〈青少年の法輪功修練に反対する〉の著者何祚庥院士が「反偽科学」を掲げて中医批判を行っている以上、政府が正面からこれに反対するのはむづかしい。また、前述した方舟子は、法輪功事件のあった1999年5月30日にアメリカ発行の《新語絲》で何祚庥院士の法輪功攻撃を支持する文章を書き、法輪功を「偽科学」だとして中国政府にその取り締まりを要求する署名活動をしていた⁽⁴⁶⁾という事実がある。現在の中医批判者は、「反法輪功」で一線につながっているのである。

こうした状況が影響してか、張功耀の〈中医取消署名〉には即座に反対の姿勢を示した中国政府だが、何祚庥や方舟子が中医批判にメジャー参戦してからは、中医批判の言論を直接否定するという状況はみられない。むしろ、この問題への言及を避けているようにもみえる。唯一2007年5月19日から25日までの全国科学技術活動週間に広西チワン族自治区での関連活動に招

かれ参加していた何祚麻院士が「(著名な女優) 陳曉旭は中医学に殺された」と発言した⁽⁴⁷⁾ことに対し、7月から始まる「中医中薬中国行」キャンペーン発表記者会見の席上、衛生部副部長で国家中医薬管理局局長である王国強が以下の反論をしたにとどまる。

これは人々に愛されている役者の死を借りて中医薬を攻撃するものであり、不謹慎、不道徳、非科学的である。(一中略一) 中医薬を論評するという点において最も発言権があるのは、中医薬の提供を受け、中医薬治療を受けている大衆である。科学的でない個人的な見解で数千年の歴史を持ち今なお大きな役割を果たしている中医薬を批判的に断じるのは不謹慎だ⁽⁴⁸⁾。

「偽科学」として批判されている側が、相手を「非科学」と批判する——これは、結局は「科学的であるかどうか」だけが評価基準になっていながら、科学の定義が曖昧であることを示している。

第三節 中医政策

1、中医学の地位向上と国際化

〈中医取消署名〉が出た2006年は、2月の第一回中国非物質文化遺産保護成果展にはじまり、3月の第10期全国人民代表大会第4次会議で452名の代表が中医薬関連の立法を求める14の議案を提出、5月には中国国家中医管理局が9項目の中医薬を第一期国家非物質遺産保護リストにいれると発表、7月には科学技術部・衛生部・国家中医薬管理局が合同で、中医薬の現代化と国際化のための《中医薬国際科技合作規画綱要(2006-2020)》を公布、9月24日、インドネシアスラバヤで「第8回東南アジア諸国連合(ASEAN)中医薬学術会議」⁽⁴⁹⁾が開催、中医薬を国家的財産と見なし、中医薬への偏見に基づく規定や条例を削除し、人類の幸福に貢献することを宣言、9月28日には「中国伝統文化と祖国の医学を発揚し、一般庶民を幸せにする」を旨とする病氣治療と健康増進のための「太医館」の開業を批准、と、中医薬の国際化や権威づけが着々と進められた年であった。裏返してみるならば、〈中医取消署名〉にはこうした中医格付けの動きが影響している可能性が高い。だが、政府は〈中医取消署名〉が出された直後の11月1日に、科技部《国家“十一五”科学技術發展規画》を公布し

中医学の伝承方法と辨証体系研究を強化し、現代技術に基づく中医薬診療、中医技術評価の基準と方法研究を強化する。中医薬の予防重視、原因不明の難病研究、中薬資源の持続的利用と中薬産業發展の鍵を握る技術および中医薬の国際規格化研究を更にすすめる⁽⁵⁰⁾。

と、「科学技術発展」という大枠のもとで、中医の現代化・国際化を進めることを、政府の既定路線として発表している。

2、中医中薬推進キャンペーン

2007年7月から全国展開の大型科学普及宣伝キャンペーン「中医中薬中国行」が国家中医薬管理局、中央宣伝部など17の部や委員会などの共催で始められた。期間は3年、テーマは「国粹である中医学を伝承し、優秀な文化を伝え広め、健康で調和の取れた生活を送ろう」。その思想的よりどころは

鄧小平理論と「三つの代表」という重要な思想に学び、中国共産党第16回全国代表大会(2002年)と16期6中全会(2006年)の精神を貫き、全面的に科学発展観に依って、呉儀副総理の2007年全国中医薬工作会議での講話に見られる精神を真摯に実行し、中医薬発展のチャンスをしっかり掴んで、深く広く、中医薬科学普及宣伝を展開し、中医薬発展にとって良好な社会環境をつくる。

というものであり、活動の意義については

全国的かつ大規模な中医薬科学普及宣伝活動を通じ、中医薬の悠久の歴史、科学的理論、独自の方法、良好な効果を展示することで、中華民族がその長い歴史の中で成し遂げた巨大な貢献として中医薬を理解し、中医薬が人民の健康を守り、経済発展を促進し我が国の優秀な伝統文化発揚の上で重要な地位を占め大きな作用を果たしていることを、社会に理解してもらおう。また、多くの民衆に中医を理解してもらい、中医を実感してもらい、中医薬の恩恵を広く行きわたらせることで大衆の健康を維持する。

と明示されている⁽⁵¹⁾。この活動がいつ計画され決定されたのか定かではないが、2007年1月に開催された「全国中医薬工作会議」の席上での呉儀副首相講話などが今回の活動方針と完全に重なることから、2006年10月に〈取消中医署名〉事件が起きてから計画された可能性も否定できない。全国中医薬工作会議では、2ヶ月前に大きな話題となった〈取消中医署名〉に直接言及はしておらず、またそれ以外の中医批判にも言及はしていない。だが、呉儀副首相は講話で「中医薬は中華民族が想像した科学医学であり、我が国伝統文化の至宝である。その地位、作用並びに科学性には疑いの余地がない」と述べており、中医批判に対する公式回答に相当するものになっている⁽⁵²⁾。

政府が中医薬をテーマとした「科学普及宣伝キャンペーン」を行う——ここでは、中医が「科

学」であることは政府公認の大前提であり、疑問を挟む余地はない。と同時に、そのテーマ「国粹である中医学を伝承し、優秀な文化を伝え広め、健康で調和の取れた生活を送ろう」で、「国粹」という伝統文化評価の最大級の形容詞を中医学に冠していることは、中医学の特殊な位置づけの表れである。一方、公式スローガン「中医の発展は国のため民のため」、「祖国医学の発展で人類は幸せに」などからは、「国益」、「中華アイデンティティ」という、また別のベクトルの役割を中医学が担っていることがうかがわれる。現場では実際に「国粹を称揚せよ、我が中医学を愛せよ」という署名活動も展開されているが、これは〈中医取消署名〉に対抗して出された〈愛中医署名〉と同じ発想である。

確かに、こうしたキャンペーンを行えば、中医中薬に対する人々の理解は深まるであろうが、中医中薬の発展を既定路線化するだけでは、根底にある問題の解決には到らない。中国政府がそれを認識していないはずはなく、あえてそれを避けているという見方もできる。

結 び

2007年8月8日、北京オリンピック開催1年前を記念して、《科普法》から「偽科学」という言葉の削除を求めた宋正海や、中国社会科学院哲学研究所研究員で中医の経典とされる《黄帝内经》の研究者劉長林、《中国中医薬報》総編集長の毛嘉陵など「東方科学七君子」と称される7名が、連名で《東方科学オリンピック参加宣言》を発表した⁽⁵³⁾。

もし東西の異なる科学体系を大ざっぱに一つの大きな「科学」に帰納させようというならば、それは異なる科学大系に対する認識・研究に不利益をもたらすばかりか、混乱を引き起こし、「勢力の強い」科学体系を標準としてその他の科学大系を論じるという不合理かつ不公正な結果をもたらすことにもなる。

宣言は次のように締めくくられる。(記号は原文まま)

我々の認識：東方科学が再び大いなる風邪を起こす時代が来たのだ……。

我々の確信：東方科学は中華民族の偉大なる復興実現の重要な礎石だ……。

我々の予測：東方科学は徐々に全世界に受け入れられ、全人類共通の文明となる……。

この宣言に合わせて、さらに以下の3項目の要求がなされている⁽⁵⁴⁾。(以下要約)

一、国は「東方科学」の学術的地位を確立すべきである。学術界がこぞって「科学」という語を新たに定義しなおすことを求める。

二、国は「東方科学」の発展のために教育などの環境作りをすすめるべきである。五四新

文化運動時期の著名人による中国伝統文化に対する一面的な見方を整理清算すべき時期にきている。小中学校の教材として採用されている魯迅の〈《呐喊》自序〉にある「中医は意図的にせよ無意識にせよ、一介のペテン師にすぎない」という一文の削除を強く要求する。個人の文集に入っているのはかまわないが、小中学校の教材にこのような明らかに間違った言論が載っていると、青少年の健全な成長を損ない、優秀な中華文化の継承に不利になる。

三、学术界の空気をクリーンにすべきである。学术論争を娯楽化、政治化し、別の目的に利用してはいけない。いかにランクが高い学者であっても、实事求是の精神で責任ある議論を進めるべきであり、自分の専門領域について発言すべきだ。

これに対し、浙江省温嶺市委宣伝部の慕毅飛は翌日〈「東方科学」のために魯迅を削除すべきではない〉⁽⁵⁵⁾で次のように反論した。

よしんば魯迅の文章を削除したとしても、彼らの目的にはほど遠い。彼らの目的は、「新文化運動時期の著名人の伝統文化に対する一面的な見方全て」を「整理清算」することにあるが、「民主」が伝統的専制政治に取って代わったことは「一面的」とはいえず、「科学」が伝統的な愚昧に取って代わったことは決してでたらめではないと言わないのである。

そうして慕毅飛は、むしろ逆に「民主」（徳先生）と「科学」（賽先生）の地位を高めないと、「東方科学」にとっても、かえって有害だと結論づけている。

両者の主張からは、本稿で見てきた〈中医取消署名〉ならびに「偽科学」問題の核心が見えてくる。

2006年3月4日、国家主席胡錦涛は社会主義の誉れと恥（社会主義榮辱觀）を樹立すべく、《八つの榮、八つの恥》（《八榮八恥》）を提起した。

- ・ 祖国を熱愛するのを榮とし、祖国に危害を与えるのを恥とする
- ・ 人民に服務するのを榮とし、人民に背くことを恥とする
- ・ 科学を尊ぶのを榮とし、愚昧で無知なるを恥とする
- ・ 労働に励むことを榮とし、安逸をむさぼるのを恥とする
- ・ 団結互助を榮とし、他人を害し自分を利するを恥とする
- ・ 誠実・信用を榮とし、利に目がくらんで義を忘れるのを恥とする
- ・ 法を遵守するのを榮とし、法を犯し規律を乱すのを恥とする
- ・ 刻苦奮闘を榮とし、贅沢三昧を恥とする

これは、明らかに中華民族の伝統的価値観に基づいたものであり、中国オリジナルの伝統思想・

伝統文化なくしてはあり得ないものである。それは、単に伝統なくしては生まれないという意味ではない。この社会主義栄辱観は、「社会主義」が頭に冠されてはいるものの、「すぐれた伝統をもつ」「中国たる」「栄」という発想があってはじめて生まれる産物だという意味である。しかし、すでに述べたように、現在の中国は、清末から五四時期にかけて、自らが選択した「反中国的伝統」の延長線上にあり、事実、中医学を批判する側は、そのころの著名人の言説を論拠としているのである。

「徳」先生を擁護すると、孔子の教えや礼法、貞節、旧倫理、旧政治に反対せざるを得ない。「賽」先生を擁護すると、旧芸術、旧宗教に反対せざるを得ない。「徳」先生も「賽」先生も擁護すると、国粹や旧文学に反対せざるを得ない。(一中略一)今わかっているのは、中国の政治、道徳、学術、思想など一切の暗黒を治せるのはこの二人だけだということだ。もし、この二人を擁護するためであるなら、政府に迫害されようと、社会に攻撃され痛罵されようと、よしんば首を切り落とすといわれようともお受けしようではないか。(陳独秀 1919年1月《“新青年”罪案への答弁書》)

陳独秀がここで述べた「暗黒」の元凶は、そのままマルクス主義「科学」が指導する共産党の基本方針として受け継がれ、文化大革命の中で極限にまで達した。しかし、社会情勢の変化にもかかわらず、その見直しは行われないうまま今日に至っている。その意味で、「東方科学七君子」のいう「整理清算」は必要だといえる。五四新文化運動時期のような「西洋社会＝先進＝善」、「中国＝後進＝悪」という基準で構築された枠組みを現在もそのまま持ち続けることはすでに現実的ではない。その矛盾を残したまま伝統文化回帰の傾向が強まっているのは、グローバル化が進む中で、アイデンティティとしての「人々がずっと共有してきた中国独自の文化」が求められているからという側面が強い。前述したように、「西洋＝他者」と「中国＝自己」という枠組みのもと、国内的にはナショナリズムの強化、対外的には「優秀なる中国」をアピールすることが求められているのである。現在の状況は、「打倒孔家店」を標榜した五四新文化運動時期や、「孔家店を批判した魯迅の徹底的な革命精神に学べ」⁽⁵⁶⁾が叫ばれた文化大革命時期とは、明らかに異なる。当時「孔家店」として伝統文化の負の遺産の象徴であった孔子を復活させ、海外での中国語学習の拠点に「孔子学院」という名を冠したのは、孔子が「中国的思惟」(善)の象徴として国際社会にアピールするに足ると捉えているからである。

しかし、長い時間の中で相互に影響し合って形成されてきた伝統文化の中から儒学の「道徳」的要素だけを抜き取って「是」とし、それ以外を「否」とするのであれば、そこに矛盾が生じないはずがない。現在、方舟子や何祚庥らは、中医が依拠する陰陽五行論も経絡の存在も偽科学として否定、「医聖」と称される張景仲を学生以下と痛罵している⁽⁵⁷⁾。批判者が用いている

基準は「科学」(＝賽先生)だが、陳独秀は、「“徳”先生を擁護すると、孔子の教えや礼法、貞節、旧倫理、旧政治に反対せざるを得ない」と述べていたのではなかったのか。

2006年10月から、北京大学で、《大学》、《中庸》、《論語》、《孟子》、《道德経》、《庄子》、《孫子兵法》、《易経》、《六祖壇経》、《心経》、《混合経》を精読する「中国国学大講堂理事長高級研修班」が開講。今期の授業料は38,000元。授業は2ヶ月に一度5日間で実質30日。北京大学本科生の6倍程度の学費である。清華大学でも2006年9月に「中華文化精髓と現代企業戦略高級研修班」が開講、今年は「伝統文化と現代的管理CEOコース」が開講している。修業年限は1年。講義は月に一度、金曜から日曜までの3日間。学費は26,000元、易学、儒家文化、道家思想などを通じて管理学を学ぶという。どちらの課程も受講者は、理事長・社長など企業トップや行政機関の所長クラス以上に限定⁽⁵⁸⁾。清華大学のコースには「人倫関係を基礎とする団体協力精神」ユニットがあるが、その教学内容紹介には「各階層の人々は、おのれの“分”をわきまえ(原文は“安分守己”)、礼を守らなければならない」とある。「安分守己」とは実質上、封建社会において中国農民を縛ってきた人生観である⁽⁵⁹⁾。すでに地位と財を得ている人間だけが手にすることのできる「修了証書」に、封建社会の為政者階級の残像を見るのは筆者一人であろうか。

2006年3月第10期全国人民代表大会第4次会議の席上、中華民族文化促進会副主席の田愛習は〈中国伝統文化普及に関する提案〉を出し、次のように述べている⁽⁶⁰⁾。

改革開放以来対外交流が増加し、それに伴って祭日を含む西方文化が中国に入り込み、今日の中国人、とくに若者の考え方や行動を変えつつある。(一中略一)教育を通じて、学生に伝統ある中国の歴史や文化についての知識を与え、理解させ、伝統文化の精華をわからせ、伝統的な美德をもたせ、伝統的な民族精神を奨励して、理想的かつ道徳的で教養があり規律ある、新しいタイプの人材に育てる。

今日見られる、「伝統文化を発揚せよ」という主張は、伝統文化自体が変化したことによって出てきたものではない。それ自体が変化しているわけではないのに、基準軸が変わったことによって、伝統文化に対する評価も変わったにすぎない。

中国中央電視台で毎週国際放映されている医療番組《中華医薬》は、2007年7月12日、〈天のお陰で中国には中医がいる〉を放映した。番組では中医による末期癌治療例、SARS治療における活躍、植物状態に近い状況からの回復と、「奇跡」に近い治療例を紹介、さらに神州6号の宇宙飛行士という極めて現代的な専門職についている者が中医の体調管理によって成り立って

いる現状を紹介し、最後にこう締めくくる。

中医を古くて神秘的と感じる人もいれば、とても信じられないという人もいる。だが歴史をさかのぼれば神農から今日まで、数千年このかた、中華民族は中医薬の庇護のもと、新しい命を生み、健康を維持してきた。周りを見渡すと、海の彼方からヨーロッパ大陸にいたるまで、針灸の神業、中薬の香りが広がっている。生命の重みをずっしりと受け止め、自らの理論と方法が理にかなっていることを伝えていくことを、言葉ではなく、事実で語っている。中医薬に課せられた任は重く、道は遠い。

通常の《中華医薬》番組作りとは異なるこの特番は、おそらく「中医中薬中国行」の開始に合わせての企画であろう。番組の冒頭では前述した女優陳曉旭の死にも言及しているのだが、「神医がいたらどんなにいいか」という話の前振りとして使われ、その前振りを受けて、番組は「神医」「神奇」「奇跡」という語を多用、タイトルからもわかるように、西洋医学的な「科学」の土俵にあがることなく、「有効な」「伝統医学」という「事実」の土俵の上で中医学が描かれる。たしかに西医と同じ土俵で語るのは無理があるが、だからといって、このような番組作りをすることが中医にとって有用といえるだろうか？

西医が出現するずっと以前から、すでに治療を行っていた中医を、その成り立ちや歴史的蓄積を抜きにして、ただ近代的な意味での「医学」というカテゴリーに分類し、西洋医学の尺度で語るのは無理がある。だが同時に、「医学」という分類から切り離して伝統文化としてのみ語るのも無理がある。人類史上最も古い文明の一つという長い歴史を有する中国——その伝統文化を評価する際には、程度の差こそあれ、こうした難しさがつきまとう。本稿で見てきた〈中医取消署名〉や「偽科学」という語を《科普法》から削除するよう求める署名に象徴される問題は、中医学の問題である以前に、いわゆる近代科学が出現する以前から現実にその役割を担ってきた伝統文化を、どう現在に位置づけるかという問題であり、と同時に伝統文化全体の評価の問題、評価に際し、その基準をどこにおくかという問題でもある。また、伝統文化本体ではなく、それを手段とするアイデンティ構築の問題をも含んでいるのである。

豊かな伝統の中で他に類を見ない独自の文化システムを早くから実用に供していた中国、かつ、一旦その長い伝統を棄て、近代科学を旨とする社会主義の道を歩むことを選択した中国、世界有数の多民族国家であり、最大の人口を擁する中国——〈中医取消署名〉をめぐる噴出した問題は、こうした中国であればこそ起きた問題である。本稿では触れなかったが、中医はすでに、中西医结合という、中医学の歴史や理論と真摯に向き合うことのないまま安易に採用された折衷方式により、それ自体、伝統文化としても危機的な状況にある⁽⁶⁰⁾。その意味では、中医は伝統文化にとっての反面教師ともいえる。

中医とどう向き合うかは、今日の中国での伝統文化のあり方を考える上で、まさしく鍵となる象徴的な問題なのである。

注

- (1) 現在は《和訳》上の張功耀ブログからは削除。《溫柔一刀_力刀博客》(<http://www.mitbbs.com/pc/php?id=1268&nid=22620>) に見える。
- (2) 夏頤〈第二届全国科技文化与社会現代化検討会綜述〉《武漢理工大学学報》(社会科学版)2006年2月、第19卷第1期。
- (3) 「北京大学科学史与科学哲学」公式ホームページ内、《科学文化論壇》(<http://hps.phil.pku.edu.cn/viewarticle.php?sid=1821>)。
- (4) 掲載に到った理由については、《医学与哲学》の主編である上海中医薬大学の何裕民教授が〈如何看待近期中西医论争〉(最近の中西医論争をどう見るか)で「學術は“百家争鳴百花齊放”であるべきだという考えからだ」と述べ、補足として、自らの〈跳出中西医之争看医学—論医学之“道”的不足与互補〉(中医論争から見た医学—医学「道」の不足と補足を論ず)をその論文の前に置いている。
- (5) 《張功耀的博客》(《和訳博客》内) http://zhgybk.blog.hexun.com/5520147_d.html。《新語絲》にも9月30日に掲載、<http://xys.xlogit.com/xys/ebooks/others/science/dajia7/zhongyi107.txt>。
- (6) 原文は「任意而談，无所顾忌」。魯迅〈私と《語絲》との関係〉(《三閑集》所収)。なお《新語絲》社はアメリカ合衆国ニューヨーク州で非営利社団として登録されている。
- (7) 方舟子は各ブログサイトで、確認できるだけで10程度のブログを開設しているが、現在実際に機能しているのは《方舟子的BLOG》(<http://blog.sina.com.cn/fangzhouzi>《新浪博客》内)、《方舟子的BLOG》(<http://www.xys-reader.org/blogs/fangzhouzi>《新語絲讀者網》内)に限られる。《方舟子的BLOG》(《新浪博客》)では、中医批判に分類されている文章は、2003年17篇、2004年8篇、2005年39篇、2006年539篇に上る。
- (8) 《大話科学・方舟子專欄》(《人民網・科技・科技專題》内、<http://scitech.people.com.cn/GB/25509/43690/index.html>)は2007年2月28日〈プロテインを飲む必要がないのはなぜか〉が最後。《方舟子打假》(《搜狐・IT》内、<http://it.sohu.com/fangzhouzi.shtml>)は2005年5月27日〈中国には「科学警察」が必要だ〉まで掲載。《方舟子專欄專題》(《新浪網・科技時代》内、<http://tech.sina.com.cn/d/focus/fangzhouzi/index.shtml>)現時点で、リンクはされているがページは空白で存在。《經濟觀察網・觀察家》の專欄作家8名のうちの一人に名を連ねているが、6月12日〈脈による診断はなぜ信に足らないか〉(<http://www.eeo.com.cn/observer/special/2007/06/12/69656.html>)を最後に記事なし。それまでは1ヶ月に数本程度の記事有り。《北京科技報》の專欄からは2006年8月3日の《当医生要你吃不该吃的药》を最後に撤収。《中国青年報》の週刊《冰点・探索》欄は、4月11日の〈寄生蜂の聪明选择〉(ネット上では<http://zqb.cyol.com/node/2007-04/11/zgqnb.ht>)を最後に、《冰点・探索》欄そのものが紙面(オリジナル紙面、ネット紙面とも)から消えている。ところが、《中国青年報》ネット内検索で「方舟子」と入力すると、現時点でも毎週「冰点探索・一言堂」方舟子として記事を書いていることになっている。
- (9) 葛嘉編集〈衛生部スポークスマン：中医取消の言論および手法に決然と反対する〉(《中国新聞網》2006年10月10日、<http://www.chinanews.com.cn/other/news/2006/10-10/802232.shtml>)。
- (10) 2005年に「中医理論」項目が初めてこの計画に組み込まれている。
- (11) 〈我が院の科学研究基本情報〉(公式HP《中国中医科学院》<http://www.catcm.ac.cn/Html/kexueyanjiu/jibenqingkuang/095456290.html>)。
- (12) 国家科技部科技基礎性工作項目の一つとして、1999年から中薬国際化標準規範研究が行われている。
- (13) 上海医薬大学附属岳陽中医結合医院は三級甲等全国重点中医結合医院。中国では病院は1000点満点評価で三級九等に分けられており、三級甲等は最高レベル。《愛華網》は現在は存在せず。CEOの高明輝に関しては不詳。
- (14) 陸純〈發改委、全国に向けて医療衛生体制改革についての意見を募る〉(《北京青年報》2006年9月27日)
- (15) 《中医存廢論出る》<http://news.sina.com.cn/z/zyfc/index.shtml>。《中医廢絶断じてノー》<http://cul.sohu.com/s2006/tanzhongyi/>。《さらば中医？それとも中医を救え？》

- <http://zt.rednet.cn/c/zt/7252/>。
- (16) <http://cul.book.sina.com.cn/focus/zhongyi01/index.html>。ただし《中医在線網刊》は2004年第一期以外、発行された形跡がない。
- (17) <http://news.sina.com.cn/c/2005-02-27/03175949492.shtml>。詳細は拙稿「中国医学の現状と課題— 伝統文化の視点から」(『帝塚山学院大学研究論集・文学部』第40集、2005年12月)。
- (18) <http://qi.daqi.com/bbs/00/1237969.html>。
- (19) 中華人民共和国以降、伝統文化に向き合う際、「取其精華，去其糟粕」(その精華をとり、カスをすてる)という表現が、常套句のように使われている。出典に関しては諸説有り。
- (20) <http://news.sina.com.cn/c/h/2006-10-11/130911210014.shtml>。調査のタイトルは〈中医および中医を取り消すべきかについてあなたの見方は?〉だが、実際の設問は〈あなたは中医をどのように見ていますか?〉となっている。
- (21) <http://eladies.sina.com.cn/qg/2006/1030/1139316737.html>。〈新周刊：中医如何影响生活〉(《新浪網・新聞中心・新周刊》<http://news.sina.com.cn/c/h/2006-11-29/115911653426.shtml>)。
- (22) 《東方時空》は1993年5月から続いている中国中央電視台の報道特別番組。その柱の一つに《時空調査》があり、このアンケートはそれに該当する。アンケート用紙は<http://news.sina.com.cn/s/2006-11-07/111411448298.shtml>に、結果は<http://health.sohu.com/s2007/tcm/index.shtml>にある。
- (23) 方舟子〈私と中医の関係〉2006年11月14日(《經濟觀察報》2006年11月20日、<http://www.xys.org/xys/netters/Fang-Zhouzi/jingji/zhongyi4.txt>)。
- (24) <http://health.163.com/special/0018223L/oppose-chinese-medicine.html>。この特集は、もともと論壇形式の意見交換サイトに掲載されたものを、《網易》が独立したページとして組み替えたもの。魯迅：中医は故意もしくは無意識に人をだますベテニ師だ。郭沫若：私は死ぬまで決して中医の世話にはならない。など、具体的な言葉が引用されている。ちなみに、中医を科学的であるという答えが80%を占める。
- (25) 《搜狐・文化》特集《偽科学という語を削除する理由は多数ある》(2006年12月13日、<http://cul.sohu.com/s2006/2856/s246788661/index.shtml>)に詳細あり。
- (26) 301期<http://view.news.qq.com/zt/2007/zhongyi/>。
- (27) 302期<http://view.news.qq.com/zt/2007/fengshui/index.htm>。
- 303期<http://view.news.qq.com/zt/2007/rujia/>。
- 304期<http://view.news.qq.com/zt/2007/temple/index.htm>。
- (28) 2003年1月、国家主席江澤民による「題辞」(中華美德を継承し、伝統的な精神を育成しよう)と國務院副総理李嵐清による「序」が附された《中華伝統美德格言》(人民教育出版社)が出版されベストセラーになっている。また2004年2月には《中共中央國務院、未成年の思想道德建設を強化、改善することに関する若干の意見》が出され、ほかにも、関連古典籍の出版(ジュニア版、CD版含む)などが続いた。
- (29) 「ルーツは同じ。兩岸(中台)でともに祭る——2006孔子記念祭」として盛大に開催。なお、今年2007年の「世界儒学大会国際会議」を経て、2008年より正式に「世界儒学大会」が発足する予定。
- (30) 戴潔〈「5割近くの学生が占いを信じる」が意味するものは〉《人民日報・江南時報》(2004年12月13日、<http://www.people.com.cn/GB/paper447/13608/1217957.html>)。
- (31) 記者童曙泉〈ネット上の占トページ、3日で1.8万に。ハイテク迷信は中高生に害〉(《網易》新聞中心2004年6月14日、http://news.163.com/2004w06/12583/2004w06_1087192021866.html)、初出は《北京日報》2004年6月14日)。このほか、新華社記者純剛・陳曉虎〈算命+網絡=科学? 現代迷信調査〉(《新華每日電訊》2005年6月25日、http://news.xinhuanet.com/mrdx/2005-06/25/content_3133211.htm)というタイトルなども、そのあり方を窺わせる。
- (32) 2006年1月17日の記者滕興才〈ネット上の迷信、青少年を幻惑：あなた占う人、私儲ける人〉(《人民日報》<http://scitech.people.com.cn/GB/1057/4034175.html>)
- (33) 《人民日報・華東新聞》2006年4月5日、蘇珊、白亮の署名記事。<http://news.people.com.cn/GB/37454/37459/4272101.html>。
- (34) 23471名が参加、複数選択のため、この項目は22番目とはいえ、42.92%を占める。<http://news.sina.com.cn/c/2006-04-21/17129684464.shtml>。
- (35) 《科学時報》2007年5月11日のトップ記事。2006年9月から12月にかけて、上海市、重慶市、河北省、

- 山西省、内モンゴル自治区、江蘇省、江西チワン族自治区、福建省、広東省、湖南省、湖北省、貴州省、青海省、甘肅省、瀋陽市、深圳市、西安市など17の自治体で公務員を対象に《我が国の県所長級公務員の科学に関する素質調査票》を945部配布、回収は900部。有効回収率95.2%、有効回答900部。
- (36) 翌年8月には中国建築文化中心建築風水文化専門家委員会が成立、顧問には文化部副部長・故宮博物院院長鄭欣淼の名が見える。中国建築文化中心の公式HPは<http://www.chinacon.com.cn/index.asp>。
- (37) <http://tech.163.com/special/w/000915QE/wkx.html>。なお、反響の大きさを受けて、「建築風水文化養成コース」は「建築風水文化と住宅環境検討会」と名称を変更した上、10月28日に北京で「国際易学連合会」主催で開催されている。
- (38) <http://tech.163.com/special/w/000915QE/wkx.html>。方舟子の活動を紹介し、サブテーマとして「風水が科学という衣をまとった」、「世界は未だに“神出鬼没”」、「神秘学が科学の領地を侵略」の3項目を設けている。
- (39) 〈《易経》の中華文化に対する影響——人民大会堂において開催された「2004年文化サミットフォーラム」での報告〉 (<http://www.people.com.cn/GB/wenhua/40462/40463/3049020.html>)。
- (40) http://zqb.cyol.com/content/2006-10/08/content_1529686.htm。
- (41) <http://tech.163.com/special/00091MNL/sciobserve056.html>。
- (42) 宋正海は数百人の科学者にEメールを出し「学界における“科学”の定義をはっきりさせ、“偽科学”という語の使用を慎むよう申し入れると同時に、“偽科学”という語を《科普法》から削除するよう求める」として署名を求めたところ、11月30日までに150名の学者が署名に応じた。宋正海はこれを公開、科技部の関係筋指導者に送付すると発表した。
- (43) 2006年10月に行われた雑誌《環球人物》(人民日報社、半月刊)の記者路琰による何祚庥へのインタビューに、何祚庥が答えたなかで、「中医が陰陽五行理論に依拠しているからこそ、中医に反対する」旨述べている。インタビュー全文はpdfファイルでhttp://www.cs.mu.oz.au/~jhua/article/medicine_3.pdfに収録。最初、2006年10月30日〈中国科学院院士、中医批判を支持。陰陽五行は偽科学だ〉として《騰訊・新聞》に一部省略して掲載、http://news.qq.com/a/20061030/002207_2.htm。なお、何祚庥はここで、魯迅などの歴史上の名士が反対したことを、中医批判の論拠の一つとしてあげている。
- (44) 原文は《新語絲電子文庫》(http://xys.dxiong.com/xys/netters/Fang-Zhouzi/religion/falun_xuanchuan4.txt)でのみ確認可。ほかはすでに削除されている。また、2001年5月12日には新華社11日電として中国科学院自然科学史研究所研究员王渝生による《科学ではなく正真正銘の迷信だ——〈迷信ではなく正真正銘の科学だ〉に反論する》が発表されているのだが、これもすでに記事としては全て削除されており、わずかに法輪功の公式HP《明鏡》に残っている(<http://www.mingjing.org.cn/zjlt/03.htm>)。
- (45) 《人民日報》2000年7月10日<http://www.people.com.cn/GB/channel1/10/20000710/137317.html>に再録。
- (46) 方舟子も「私は法輪功批判の文章を書いては国内の雑誌に投稿した。官吏の汚職批判などでならしていた雑誌ばかりだったが、法輪功批判には手をつけようとせず、政府が取り締まりを決定するまでは、どこも採用してくれなかった。」と述べているように(《新語絲電子文庫》1999年7月28日王澤報道、http://www.xys.org/xys/netters/others/talk/falun_gong128.txt)、こうした通知を出さなければならぬほど、法輪功は共産党内に浸透していたのである。
- (47) 〈報告で言及：陳曉旭は中医に殺された〉《金羊網》2007年5月29日http://www.ycwb.com/ycwb/2007-05/29/content_1495831.htm。
- (48) 《衛生部副部長：中医が陳曉旭を殺したという言い方は極めて不謹慎だ》(《網易》6月15日報道、<http://discover.163.com/07/0615/08/3H11EUGM000125LI.html>)。これに対し何祚庥は即座に反論、〈何祚庥：中医には癌は治せん 中医は陳曉旭を死なせた責任を負え〉(北京青年報社《青年周末》2006年6月28日号A5面、<http://www.yweekend.com/webnews/070628/A05/070628A0501.shtml>)。衛生部副部長による再反論はなされていない。ちなみに、陳曉旭の死因は乳ガン。西洋医学を拒み、夫婦ともに仏門に帰依した。その死を悼み、《林黛玉を演じた陳曉旭、乳ガンにて深圳に死す》(《新浪網》)<http://ent.sina.com.cn/f/cxxcj/index.shtml> などの特集が組まれるなど、大きな反響があった。
- (49) 1983年シンガポールで第一回が開催、以後加入国の輪番で3年ごとに開催。

- (50) 政府発行のドキュメントファイル (<http://www.kxsz.org.cn/webedit/uploadfile.do?action=open&filepath=file/file96f7538481ab.doc>に全文有り)、p.23。
- (51) 中医中薬中国行の公式サイト<http://www.cmmu.cn/>参照。
- (52) 〈呉儀副総理副による重要講話：継承と創造を推進し、その特色と優れたところを発揮し、断固として中医薬事業を発展させよう〉(国家中医薬管理局《2007全国中医薬工作会議專題》内、<http://www.satcm.gov.cn/zhuanti/2007zyydh/ldjh/20070116/153212.html>)。
- (53) この他に、張其成(北京中医薬大学教授)、姜岩(新華社国際部科技室主任)、曹東義(河北中医研究院研究員)黎鳴(哲學家)。宣言は《天地生人學術講座・快訊》第232期(2007年8月10日、中国科学院自然科学史所宋正海責任編集、テーマ〈《東方科学宣言》と《第三只眼看中医》(第三の目で見た中医)〉(<http://www.tdsrjz.org/message3/20040300227.html>)に採録。宣言の発表場所は北京御生堂中医薬博物館。この宣言は毛嘉陵の《第三の目で見た中医——中医薬の生死のカギ解読》にあわせて行われたものである。
- (54) 吳勇責任編集〈7専門家訴える 魯迅の中医に対する不敬な表現を教材から削除せよ〉(《大河網》2007年8月14日http://www.dahe.cn/XWZX/zxyw/t20070814_1104782.htm)。8月26日には毛嘉陵自身も《第三只眼看中医》など自らの複数のブログで〈7専門家、教材に出てくる魯迅の中医に対する偏った評語の削除を求める〉(<http://mjlmjl999.blog.sohu.com/61387990.html>)を発表している。
- (55) 〈《東方科学》のために魯迅を削除するなかれ〉(《紅網》<http://hlj.rednet.cn/c/2007/08/16/1291179.htm>・《慕毅飛的BLOG》http://blog.sina.com.cn/s/blog_475e7b9f01000ccg.html)。
- (56) 羅思鼎〈孔家店を批判した魯迅の徹底的な革命精神に学べ——偉大なる革命家、思想家、文學者魯迅生誕90周年〉(《人民日報》1971.09.25)。
- (57) 方舟子著《科学成就健康》(新華出版社、2007年1月)【第二編 現代医学と伝統医学】[医者から、口にすべきでない薬を処方されたとき]のなかで「もし中医を科学であって信仰ではないのなら、張仲景を盲信すべきではない。張仲景は1000年以上前の人であり、その医学知識は基本的に間違い。今日の正規医学学校卒業生に遠く及ばない。」と述べている。《中国国際廣播電台國際在線・文化チャンネル・読書》(<http://gb.cri.cn/culture/whds.htm>)で「好書連載」として本書を提示(<http://gb.cri.cn/9223/2007/02/06/1725@1441614.htm>)、該当ページはhttp://gb.cri.cn/9223/2007/02/06/1725@1441842_20.htmに収録。
- (58) 清華大学大学伝統文化と現代管理總裁(CEO)班の詳細は<http://www.cnbm.net.cn/course/kc91644386.html>参照。北京大学中国国学大講堂理事長高級研修班の詳細はhttp://www.szceo.com/html/open_class/20061121/200611212335340875.html参照。
- (59) 抽稿「艾蕪の農民観」(『野草』35号、1980年)で、農民を呪縛する「安分守己」について詳しく述べている。
- (60) 類号:14、類別:文化宣伝、案号:0055。<http://cppcc.people.com.cn/GB/34961/59086/59091/4157309.html>。
- (61) 中西医結合の問題点については、その一端を抽稿「中国医学の現状と課題—伝統文化の視点から」(『帝塚山学院大学研究論集・文学部』第40集、2005年12月)で論じている。

※本稿で閲覧したインターネットアドレスは、2007年11月1日の時点では全て確認が取れている。